

中国人大学院生の留学動機に沿った言語習得支援の方策

——日本在住人文社会科学系専攻者の場合——

徳永光展

要旨

日本留学を希望する学生の動機に日本語習得とその能力を武器とした就職が目標として挙げられることは言うまでもない。例えば、日本語能力試験の1級(N1)合格は外国人学生が日本の大学や大学院に入学する際に要求されることが多く、留学生にとっての目標となることも多い。本発表は、中国から大学院修士課程に留学してくる大学院生の入学目的をヒアリングした結果報告と彼らを大学院生活に適應させる言語習得支援の方策を提言しようとするものである。

1 目的と方法

人文社会科学系大学院生の留学目的に言及し、日本在住の中国人留学生に特有の傾向を観察すると共に、当該学生たちへの言語習得支援の方法を探ることを目的とし、発表者が勤務する福岡工業大学大学院社会環境学研究所修士課程における留学生の観察とそこでの授業「日本語コミュニケーションスキル特論」実践を振り返るものとする。

2 大学院の状況

福岡工業大学大学院社会環境学研究所修士課程における指導教官の専門分野は、法律、政策、経済、経営、会計、民俗、社会、文学等、人文社会科学分野の全域に跨っている。2007年4月に設立(定員6名)し、2009年3月に第1期生修了、2019年3月に第11期生が修了した。この間、入学者は圧倒的に中国人留学生で占められた。全修了生に占める中国人学生の比率は84%にも及ぶ。

3 学生の背景

学生のプロフィールを分析すると、以下にみるように5つに分類できる。

- ① 中国で大学(非日本語専攻)を卒業後に来日し、日本語学校在籍や大学での研究生生活を経験した者
- ② 中国の大学で日本語を主専攻とした者(含・協定校)
- ③ 高校卒業後に来日し、日本語学校に在学し、その後、日本での学部教育を経た者
- ④ 高校卒業後に来日し、日本語学校を経て、日本の短期大学に入学。卒業後、大学の第3年次編入学を経て、学部卒業に辿り着いた者
- ⑤ 日本の大学卒業生(福岡工業大学社会環境学部、及び他大学)

特徴としては、全員が私費留学であり、日本でのアルバイトを余儀なくされる留学生生活を送っている。大学院に入学したい裏に潜む動機付けとして考えられるのは、高学歴志向に加え、モラトリアムの延長、換言すれば学部卒業時点で日本での就職内定が得られない状況も観察される。また、帰国すると、国内の日本語専攻学生との激しい競争にさらされる状況があり、それを回避したいという発想も透けて見えるのである。よって、指導者側には、苦学生への配慮が求められるし、N1未取得者への対応も重要な課題となる。なお、志望者は存在するものの、博士後期課程進学者は現在のところ出ていない。

4 入試

本専攻への入試は、英文和訳(英和辞典1冊貸与)、専門Ⅰ(指導教官の専門分野に関する論述問題)、専門Ⅱ(入学後の研究内容に関する論述、例年同一問題)、及び面接(日本語能力と志望動機の確認)により行っている。

5 問題点と貢献

問題点として指導教官が中国語による一次資料に無知な現実があり、中国地域研究を日本語で執筆する修士論文を如何に評価するかという点が挙げられる。なぜならば、粗雑な翻訳や引用が発生する温床がそこには存在するからである。また、N1取得者でも全面的に日本語のチェックが必要である。逆に、評価できる点として、日本における中国研究への貢献にはなっていることを指摘しておかなければならないであろう。

6 変化する実践

a 「日本語コミュニケーションスキル特論」

この授業は、中級以上であるとはいえ、非常に異なるレベルの学生が混在する。そこで、これまでに以下のような授業を順に展開してきた。

(1)留学生の専門分野におけるレポートの発表と添削、議論を行うもの。これは、環境問題や経営学が中心的なテーマとなったが、授業者が内容に関して無知という問題を抱えた。

(2)文学作品の原文と中国語訳を比較させ、議論する授業。ここでは、報告者の専門である夏目漱石の小説から『夢十夜』、『坊っちゃん』、『それから』、『心』等を取り上げたが、授業者が中国語訳を読めないため、そこでの議論に責任を持っていないという問題が生じた。

(3)学部教養力育成科目「日本文学」の授業をアレンジし、夏目漱石『私の個人主義』や森鷗外『妄想』等を読ませる授業を展開しましたが、専門的な日本文学の授業を留学生が望んでいないため、ミスマッチが生じた。

(4)今後は、留学生が N1 以上を追求できる話し合いや作文を中心に据える授業を志向していくべきであると痛感している。

b 修士論文指導の現場

留学生在が 40000 文字の日本語を作文できるかという、厳しい現実が存在する。なぜなら、学生は日本語によるアカデミック・ライティングの経験がないからに他ならない。いや、中国語でも、論文執筆経験のない学生が大多数なのである。よって、一次資料の引き写しといった不正も発生しかねない危険性と常に隣り合わせにあるし、草稿は一文毎に作り変える必要があり、教官側に加重負担を強いる状況からなかなか脱出できない。

7 日本での就職活動

留学生の履歴を活かすためには、日本語や環境諸問題への深い知識が活かされる職場が得られることが望ましい。日本での就職希望者に対しては、就職課が強力なバックアップを惜しまない。度重なる就職指導講座の開催により、志望動機書の執筆や面接指導など、継続的に支援している。

8 結論と今後の課題

留学生にとっては、N1 合格に加えて、さらに高度な日本語能力を獲得し、日本語コミュニケーション能力を駆使した就職が実現することが望ましいことは言うまでもないが、教師側には学生により添うための異文化理解や異文化コミュニケーション能力が相当に必要となるのである。また、今後の課題としては、修士論文執筆指導方法のさらなる探求、日本での就職ルートのさらなる開拓に加え、指導教官団の加重負担への対応を掲げておきたい。

注

福岡工業大学大学院社会環境学研究科社会環境学専攻修士課程（2007 年 4 月設置、1 学年定員 6 名）に提出された留学生の論文テーマを参考までに列挙したい。修了生の大半（約 84%/51 名中の 43 名）を占めるのは中国からの留学生だが、2009 年から 2019 年までの 11 年間に提出された論文題目は以下のものであった。純粋に日本研究に取り組んだと判断される論文は 2013 年に提出された「地方自治体による協定を用いたレジ袋削減策の動向と課題」と 2019 年に提出された「福岡県の持続可能な水産物の振興——有明海産アサリに焦点を当てて——」の 2 件のみであり、その他は中国研究、または日中比較研究を目指す内容が扱われていることが分かった。

2009 年【第 1 期生】

「中国における企業の環境経営の研究と提言」、「中国における環境マネジメント・システム——地方政府の事例を中心に」、「中国における「退耕還林」政策中止に関する問題と今後の展望」、「中国における環境会計の研究」

2010 年【第 2 期生】

「中国の携帯電話産業」、「中国の経済発展に伴う日中貿易の構造的変化の研究」、「ドイツ・日本・中国にけるエネルギー政策に関する研究——再生可能エネルギー政策を中心に」、「中国ホルチン沙地における砂漠化及び農牧業の現状と課題」、「環境ビジネスの市場拡大と中国の課題」、「急拡大する中国の自動車産業の動向と将来の方向」、「中国における経済発展と産業構造の転換——中部地域を中心に」、「持続的経済発展を模索する大連」

2011 年【第 3 期生】

「企業における環境報告書に関する研究——日本及び中国の家電メーカーの事例を中心として」、「中国における直接投資の動向と問題」、「ホルチン沙地における生態経済モデルに関する研究」、「日本と中国におけるマテリアル・フローコスト会計の動向」

2012 年【第 4 期生】

「中国河北省における農業用水と“一提一補”制度」、「中国内モンゴルオールドス市の都市化と飛砂防止について」、「中国水汚染防止法の規定に内在する問題——日本の水質濁汚防止法と比較しての研究」

2013年【第5期生】

「日中の廃棄物問題に関する比較研究——福岡市と廈門市における廃棄物の処理状況を中心に」、「マテリアルフローコスト会計の理論と事例研究——中国における建設業を中心に」、「地方自治体による協定を用いたレジ袋削減策の動向と課題」〔日本研究第1号〕、「中国家電産業の発展——ハイアールを中心に」

2014年【第6期生】

「身近なニュースの重要性——ジャーナリストの取材活動に対する提言」、「中国人日本語学習者にありがちな問題点」、「中国新疆における水資源のマテリアルフローコスト会計導入の可能性——理論と事例研究」、「夏目漱石『心』中国語訳の研究——林少華訳の評価をめぐって」

2015年【第7期生】

「夏目漱石『心』中国語訳の研究——1982年版から2013年版までを手掛かりとして」、「日本と中国における企業の社会的責任の比較研究——サッポログループと青島ビールの事例を中心に」

2016年【第8期生】

「中国の大気汚染問題と石炭火力発電所の環境対策——中国・青島の熱電会社を事例として」、「中国における若年層の就労意識の変化と雇用管理について——日本の雇用モデルの中国企業への応用」、「マテリアルフローコストの理論と事例研究——中国における木材製造業を中心に」、「夏目漱石『それから』中国語訳の研究——呉樹文訳の分析」、「2000年以降の中国内陸都市における経済発展とリサイクル政策の課題——内モンゴル・バヤンノール市を事例として」、「中国の再生可能エネルギーの現状と発展——風力発電に関する事例調査を中心に」、「忘れられる権利——中国におけるインターネット環境での個人情報保護の将来」

2017年【第9期生】

「中国金属リサイクル産業における産業政策の課題と展望」、「中国における鉄スクラップ貿易の現状と課題」

2018年【第10期生】

「中国重慶市における環境汚染企業の移転政策とその課題」、「中国養豚業におけるマテリアルフローコスト会計の展開と適応可能性」

2019年【第11期生】

「中国の地域格差から見える持続可能な発展への展望」、「福岡県の持続可能な水産物の振興——有明海産アサリに焦点を当てて」〔日本研究第2号〕

また、上記以外の留学生による修士論文としては、台湾からの学生が取り組んだ「日本と台湾のエネルギー政策に関する比較研究」（2014年）1件のみである。一方、日本人学生が取り組んだテーマとしては、「レジ袋削減方策」（2009年）、「ダム上流にある産業廃棄物処分場の問題——解決に向けた市民運動」（2010年〔社会人学生第1号〕）、「地方自治体における森林整備等によるCO₂削減の認証制度について」（2011年）、「太陽光発電普及の要因分析と政策評価」（2014年）、「防災を取り巻く現状と、ArcGISを活用した糟屋郡新宮町における3D防災地図製作について」（2017年）、「福岡県の生物多様性の保全と環境教育に関する研究」（2018年）、「小売業における環境経営の有効性と課題——小売業における省エネ投資の在り方」（2019年）がある（計7件）。

以上を総括すると、同専攻は環境問題を中心とした人文社会科学的研究を主として中国からの留学生が日本語で学び、日本語で発信する形で発展してきたと言える。

参考文献

徳永光展「中国人大学院生に対する日本語論文執筆支援の実践——社会環境学専攻学生を例として——」、「商経論叢」第49巻第1号 九州産業大学商学会 2008年9月

徳永光展「留学生の日本理解に資する授業構築の試み——日本近代文学作品の翻訳を取り上げて——」、「山口国文」第39号 山口大学人文学部国語国文学会 2016年3月